



TITLE:

<Book review>Ratchabanditsathan,  
ed, Khwamru thang Aksorasat,  
Bangkok : Ratchabanditsathan, B.E.  
2508 (1965), 5+321p

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

---

CITATION:

桂, 満希郎. <Book review>Ratchabanditsathan, ed, Khwamru thang Aksorasat, Bangkok : Ratchabanditsathan, B.E. 2508 (1965), 5+321p. 東南アジア研究 1967, 5(2): 428-429

ISSUE DATE:

1967-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55387>

RIGHT:

12のペーパー、ビブリオグラフィーおよびタイ語用語のグロッサリーから成るが、今までにあまり名の知られていない若い研究者のペーパーも取り入れられている点が興味深い。ただ、この少ないページ数で12のペーパーを集めているのであるから、どれもみな短いものばかりで、取りあげられているテーマも小さいもので、かなり概括的である。しかし多いようで案外すくない北タイに関する研究書で、しかもタイ人以外の ethnic groups についてのペーパーが半数以上の7編を占めているのであるから、この地域の研究者にとっては、やはり興味をそそるものだといえよう。12のうち言語に関するものは、(1) R. B. Jones, “Phonological Features of Northern Thai” および (2) Herbert C. Purnell, Jr., “Two Grammatical Features of Northern Thai” とであり、いずれも北タイ方言 (N.T.) をテーマとしたものである。わたくしは他の分野のペーパーに関してどうこう言う資格はないので、以下、この二つのペーパーに話を限りたいと思う。

(1) は全部で5ページであるが、取りあげられている言語は Prae, Lamphun, Chiangmai, Chiangsaen, Nan, Bandu, Chiangrai の七つの北部方言および中部方言 (C.T.) である。著者の目的は、N.T. の中でもこれらの各小方言は互いに異なりながらも、C.T. にはないある共通した点を持っており、これが N.T. と C.T. とを分かつ要素であることを、簡略に示そうという点にあると思われる。このペーパーでは initial consonants と tones とに関して、以上の七つの N.T. と C.T. とを比較したものである。全体として別にこれと言って新しいものはないが、その目ざしている点はひじょうに興味の持てるものだと思う。例えば、N.T. と C.T. とのバウンダリーをどの辺に引くかといったような問題になると、さらに多くのこの種のデータが必要になってくるのではなからうか。著者もふれているように、Uttaradit, Pitsanulok あたりの方言についてこのようなデータを得ればおもしろいのではないかと思う。これから N.T. に関して field work を行なうならば、どこか一つの地にとどまってその方言の極めて詳しい記述研究を行なうか、あるいはひじょうに多くの地点を選んでそれぞれの方言を他と異ならしめている要素を明らかにしてゆくか、

この二つの線にそって行なうことになると思うが、本ペーパーは後者の行き方を進めるための出発点を示すものだと思う。

(2) は N.T. (Chiangrai, Maechan District) のと C.T. との文法構造を対照したもので、いわゆる比較言語学的研究ではなくて、両方言の “contrastive study” と言うべきものである。全体で6ページ近いものであるから、両方言の文法構造全体を対照したものではなく、compounds および unrestricted intensifiers (e.g. /...càt, nák, etc.) における語順を対照している。compounds については /náam/ <水> および /càt-/ <ひじょうに、実に> (N.T.) について、これらが他の語と結合して compounds を構成する際の語順を対照する。例えば N.T. /náammê-/ <河> : C.T. /mêenám/. unrestricted intensifiers は、かなり数が多いのでここにあげることは出来ないが、同じような方法で C.T. との違いを、語順だけでなく semantic shift に関しても、浮きぼりにしている。このペーパーは以上の2点に関してのみ両方言を対照したものであるが、文法構造全体の対照研究の行なわれることが望まれる。N.T. のどれか一つを C.T. と比較する場合、音声構造のみを比較することは、現代では、あまり意味がないとわたくしは思うが、この種の文法的な対照となると、今までにまとまったものがないだけに、N.T. の field worker にとってたいへんおもしろい研究になるのではないだろうか。

(桂満希郎)

Ratchabanditsathan, ed. *Khwamru thang Aksorasat*. Bangkok: Ratchabanditsathan, B.E. 2508 (1965). 5+321p.

本書はタイ国王立研究所 (Royal Academy) がこれまでに発行したことのある、主としてタイ語に関する論文および告示の類から、適当なものを選び新たに1冊の本にまとめて出版したものである。したがって、各文の初版年代はかなり古いものばかりであるが、その内容を見ると、タイ語に関心ある人達にとってまだその価値をうしなわないものばかりである。これら一つ一つの出版物が現在では入手不

可能であることを考えれば、本書のような形で再出版されたことはありがたいこととせねばならないだろう。本書に載録された文の著者名、題名、初版年代を示すと次の通りである。(1) Phya Anuman Rajadhon, 「タイ語における語変形・音節拡張」\* 1952; (2) 辞典編纂委員会書記, 「何故 “Chpho” と綴るか」1951; (3) Charoen Intharakaset 「辞典編纂委員会の事業」1953; (4) 内閣総理府および王立研究所告示「タイ語のローマ字表記」1939; (5) 内閣総理府告示「外国語単語のタイ文字表記」1942; (6) 内閣総理府および王立研究所告示「大陸名、国名、主都市名、大洋名、海名および島名のタイ文字表記に関する規定」1963; (7) Cham Thongkhamwan 「ラームカムヘーン王時代におけるタイ文字とコーム文字との比較」。これらの中で純粋に「論文」の性格を帯びるのは(1)および(7)である。(3)は辞典編纂の際の討議録から興味あるものを集めたもので、内容的には(2)もこの中に含まれるものとみてよい。(4), (5)はローマ字のタイ文字表記およびタイ文字のローマ字表記に関する規定であり, Haas 式の音素表記になれた者にとってはなじみがたいところがあるが, いずれもかなりよく知られたものである。(6)はタイ語で物を書く際に参照するのに便利である。

(1)はクメール語から来た infix を持つタイ語の単語に関するもので, 本書を通じて最も興味深く読ませるものである。この infix と言うのは /kraɲ/ : /kamraɲ <k-am-raɲ/ における /-am-/ の類で, 現代タイ語には極めて多く存在するものであるが, これを音韻にもとづいて全部で九つのグループに分類し, 多数の例を集めたものである。ただ本論は何らかの結論を提出する論文というよりは, むしろ資料を整理整頓して研究の資料として供するものと言った方がよいだろう。歴史的あるいは比較的研究の際の便利な資料となるのではなかろうか。(7)はラームカムヘーン王碑文のタイ文字は当時の略式コーム文字 (akson khom charūk に対する akson khom wat) およびそれ以前より他のタイ族 (ルー, プータイ等) によって使用されていたモン系文字とに由来するものだとの考えにもとづき各文字を比較している。

以上のように, 本書の内容は真新しいと言うものではないが, なかなか興味深いものばかりであり,

また本筋とは直接関係のないような部分にも, 色々と研究のきっかけになるような点を多く含んでいる。

\* 以下題名は筆者の私訳

(桂満希郎)

Tatuo Kira and Keiji Iwata, eds. *Nature and Life in Southeast Asia*, V. Kyoto: Fauna and Flora Research Society, 1957. vii+312+20p.

大阪市立大学を中心とする東南アジアの研究報告書である。吉良竜夫・岩田慶治両氏の編集記にもあるように, マラヤ・タイを中心として, カンボジア・北ボルネオを含んだ資料の研究報告であり, とくに, 古生物・昆虫・霊長類・人類を中心にして, 新三カ年計画がはじめられるという。京都大学と, 大阪市立大学といずれも関西の大学が, 期せずして同じ地域の調査をはじめていることは, 日本の海外調査の中核の一つを形成し, たがいに良い意味での競争者として, たいへん有意義である。ひとつのモデル・ケースともなるであろう。今後とも, 同大学の研究の発展を願ってやまない。内容は次のとおりである。

TJBE 1961-62の淡水藻類——平野実

北部タイの山村における栽培植物

エノコログサ属——ウィルウェーバー・岸本

トウモロコシ属——町田暢

タイの森林の3型の生態的研究

群落の呼吸——依田恭二

主としてカオ・チャン降雨林における乾燥重量

物の生産について——吉良竜夫・小川房人・

依田恭二・荻野和彦

東シナ海周辺の淡水プラナリア——市川純彦・川

勝正治

タイのササラダニⅡ——青木淳一

カンボジアのトンボ目について——朝比奈正二郎

タイおよび北ボルネオのアメンボ科——宮本正一

タイにおける害虫の天敵の基礎研究

前社会性膜翅類の生態——岩田久二雄

北タイの Thai Yai, Thai Lu その他の山地民

族の農耕について——岩田慶治・松岡通夫

(吉井良三)